

# Hermann Broch 研究

## I

### „Die Schlafwandler“

樋口 忠 治

#### 10. 「価値の崩壊」について

現代の芸術家・作家、いや人間一般の直面している不安感のひとつは、価値規準の喪失ということではあるまいか。人間の疎外化が拡大され、深まれば深まる程、或る価値領域と他の価値領域とのくい違いはそれだけ増大していくように思われる。そしてそれぞれの価値領域の共通性はますます稀薄になり、それらの価値領域すべてに共通な上位価値というものは最早や存在しえないとさえ考えられる。

Huguenau は合目的な行動をする人物である。彼の行動のひとつひとつは完全に合目的であり、合理的であり、正常である。彼は有能で野心的な商人であったし、良心的で慎重な商人であり、商人としての義務には忠実であった。彼が Esch を殺害したということは、なる程商人としての義務圏にははいていなかったとしても、商人としての義務の慣習に悖りはしなかったのである。その行為は商人的価値体系が一時的に止揚され、個人的価値体系のみが残っていた時間に行なわれたものであった。戦争のさまざまな体験を経て、再びもとの仕慣れた仕事へと戻っていった彼の、至極平和な生活にとりまかれ、享楽の時間を惜んで勤めに励み、町の有力者への道を登っていった。その彼は戦争体験の中に、脱走兵として生死の境をさまよって来たのであり、或るときはほとんど詐欺といってもいい行為を合法的に行ったこともあった。

だが問題は或る現実領域が他の現実領域と全く無関係であり、それぞれがそれ自身で完結しているということではなくて、いわば刑吏と死刑囚とが同一の人間の内部に存在しているということであり、従って一々の現実領域が最も異質な要素をそれ自身の内部で結合しようということなのである。個々の人間は自分自身をノルマルだと思っている。なぜなら、個々の人間の内面的なものはすべて、その時々々の論理的な動機に基づいて進行しているからである。にも拘らず、刑吏と死刑囚とが同一人の内部に存在するということは、やはり一々の矛盾であり、不合理であろう。

Huguenau の合目的な行動には完全に装飾を去った論理がある。その行動のひとつひとつは全て必然的であり、そういう風になって、それ以外にはなりえなかったという首尾一貫した必然性をもっている。だがしかし、装飾を去るということは遂には無に、従って死につながっていきはしないであろうか。なぜなら、単純な論理であるが、目的のための存在ではなくて、存在のための目的が優先するからである。勿論彼は自分が殺人行為を犯したことがあるかどうか、或いは革命活動を行ったのかどうか、そんなことについて考える必要はなかったし、実際考えはしなかった。しかしもし考えたにしても、自分の行為は理性的であったし、他の人間であっても自分が置かれたような状況の下では決して別な行動をとりはしなかったであろうと考えたに違いないのである。

合理的なものとの方法には常に接近という方法にすぎない。無限に小さくなっていく輪を描きながら、非合理的なものに到達しようと狙ってはいるが、しかし決して到達することのない包圍方法にすぎない。合理的なものは単に原子化するだけなら幾らでもできる。しかしその無限のプロセスの果てにやはり分解不可能な非合理的残滓が存在するのであり、そこには自律的な理性と並んで、同じく自律的な

非合理的生が存在すると考えざるをえない。そこでは cogito が sum に先行するのか、それとも sum が cogito に先行するのか、そういった区別は不可能であり、無意味になる。この不合理の世界、矛盾そのものの時代においては——それは決してかつては合理的世界であったものが非合理的世界になってしまったという意味ではなく、もともとこの世界そのもの、生そのものが不合理な存在であり、矛盾に満ちたものであることが意識化されるようになって来たという意味においてであるが——例えば、宗教の価値体系において神の存在が絶対的な上位価値として、他の一切の価値の上に君臨しているというような意味では、最早や如何なる絶対的な上位価値も存在しえないのであり、一切はそれぞれその独自の方向に自律的に進んでいき、徹底的に己れ自身の価値を主張し、追求し続けるのである。個々の価値領域は平行化し、一つの共通な価値母体を形成することは不可能である。このような時代においては最早や神の言葉は失われており、事物の言葉が存在するだけであり、事物を貫く自律的な法則が残されているにすぎない。このように全ての存在価値がそれ自体の自律的な姿勢をとって互いに相並んで同一の局面に存在しているのであるから、最早や古典的な収斂的な価値体系ではそれらを律しきれなくなり、それらをいわば「体系づける」ためには、このような状況に適合した価値の「体系」が必要となる筈である。

## 11. Ulysses の意味するもの

Broch は Ulysses を „Schlafwandler“ を書く前に読んではいなかった。1936年に彼は「J. ジョイスと現代」を書いた。この一文は現代における、就中現代文学における Ulysses の意義を明らかにした一文であると同時に、現代における文学のとるべき方向と方法に対する彼自身の再認識、乃至は意識の顕在化ということができよう。彼は Ulysses を知って、初めて自分が何を書きたかったのか、そして何を書かねばならないのかをはっきりと認識したのだといっても過言ではない。

「ユリシーズ」から響き聞えてくるショッキングな感動、それは理性的なもの、意識的なものを遙か彼方へほうり出してきている。そして、伝統的ではあるがしかし最早や死んでしまった一切の存在形式に対して深い嫌悪感を示し、的確ではあるがしかし最早や何ひとつ云えない理性的な思考に対して、また美しくはあるが最早や何ひとつ表現できない言葉に対して、絶望的な反感を示している。それは文化嫌悪の塊りであり、合理性への嫌悪であり、挑戦に他ならない。「ユリシーズ」の内容を成しているその時代の平凡な日々、それは大戦前の平均的な生活の単調さであった。その中から取り出した僅か 16 時間の生活断片が 1200 頁にわたって記述されているのである。とすると、1 時間が 75 頁、1 分毎に 1 頁強となり、1 秒がほとんど 1 行になる。

「ユリシーズ」の手法において最も重要なのは同時性である。この世界を包んでいる捉え難いもの、世界の実体であり現実である把握し難いものを、それぞれバラレルな現象として、同時的に進行しつつある個々の現象の展開として、象徴の連鎖によって捕捉しようとするその努力を、われわれは到るところに感じとることができる。そして、この同時性を志向する努力が、たとえ並列的な存在、混入し合った存在は時間的に前後せざるを得ない記述という方法によっては結局表現されえないという制約を打開することができないとしても、また一回限りのものを反復によっては表現しえないとしても、なおかつ同時性への志向が全ての叙事詩本来の目的であり、一切の文学の目標であることには変りはないのである。

古典的物理学だけしか知らなかった時代においては人は自分の眼で見ることに従って時間的に順序だてて、即ち前後関係において見る以外の方法を知らなかった。そこに Bildungsroman の成立の可能性が存在した根拠があると云ってもよいであろう。しかしそれは見るという行為、観察方法の能力がそうさせたのであって、決して世男の実体がそうであるということにはならない。現代においても人は自分

の眼を信じはするが、しかしそれが万能ではないこと、いや場合によっては自分の眼が自分自身を裏切ることさえあることを信じざるをえない立場に追いこまれている。

相対性理論によれば、そこには根本的な錯誤がある。即ち、見るという行為自体、観察行為自体に欠陥がある。理想的な「特殊な」場合を想定した上でのこととはいえ、観察者乃至は見るという行為はその観察の圏内に組み入れられねばならない。つまり客体と主体との統一がなされなければならない。

古典的な小説はリアルで心理的な生活状況の観察で満足していた。そしてそれを言葉という手段で記述することで満足していた。言葉というものを固定したもの、静的なもの、充分用意を整えきった道具として用い、描写していた。「ユリシーズ」の方法は本質的にそれとは違う。もっと複雑なものだ。Joyce の場合、対象を単に観察函の中に置いて、それをただ記述すればよいというのではなく、描写対象を記述する言葉もまた、描写の媒体として、その観察函の内部に所属しなければならないという認識がある。即ち彼が目指しているのは、描写対象と描写主体（描写手段を含む）の統一ということなのである。換言すれば、対象を描写する主体と手段と方法もまた描写さるべき対象と同じ圏内に位置していなければならないということなのである。

## 12. 「時間」の問題について

われわれの意識における時間と、機械的・絶対的時間とが一致していないことは疑う余地がないであろう。時間的視界の構成は等質的ではなく、例えば過去を回想する場合、記憶や想起は規則的に整理してはいない。比較的重要な事件が連続を切断しており、個々の事件をわれわれはその切断面の前後に配置するのである。この際に時間的距離はむしろ空間的距離に転換されている。そしてこの空間的距離もやはり等質的ではなく、その相対的持続—距離は想起の数によるということが古くから指摘されている。意識における時間は等質的世界でもなく、純粹な量でもない (P. Fraisse)。

自然科学の世界では本来確定しているものをわれわれが知らない場合には、適当な装置または実験によってそれを知ることができる筈である。ところが本来不確定なものは、それを確定したものとして考えることが原理的に間違っているのである。従って、適当な装置または実験によってそれが確定するようになれば現象は全く異ってくる。換言すれば一定の事情のもとである物理系に不確定な性質がある場合、その性質を確定的に測定しようとするれば、その試みはこの物理系の以前の知識をもとにした、それ以後の系の行動に対する予言を無効にしてしまう。即ち、不確定なものを確定せしめることは自然現象を変更せしめることになり、自然現象をあるがままの姿で捉えることにならなくなる。

小説の方法論においてもまた、これと似た事情が考えられはしないであろうか。即ち、不合理の世界、デュナーミッシュな世界、不確定な世界の実体を描写表現するのに、「合理的」序列とシュターティッシュな「言葉」とだけを以てすることは、不確定なものを確定してしまうことになり、従って描写さるべき現象の実体を変更せしめることになりはしないであろうか。この場合、描写の対象は記述という行為と同時に、「言葉」と共に、既に異質化し変更せしめられてしまっているのである。このような言葉の機能、描写のメカニズムを認識するならば、描写対象を変更することなく表現するためには、即ちそのような不確定な対象、「不合理な」世界、デュナーミッシュな世界の実体を改変することなく、あるがままの姿で描写表現するためには、それらの対象が置かれている系、すなわち不確定な、「不合理な」、デュナーミッシュな系の方法が用いられねばならないことは明らかである。

ところで、われわれ自身の心の動きを観察してみると、例えばAという意識が中断してBという意識が始まり、そしてまた再び意識Aに戻っていったり、或いは全く別な意識へと継続していく、といったプロセスが極く普通に行なわれていることが判る。そのような心の動きを描写する場合には、描写自体

もやはり中断を必要とするし、描写対象も跳躍し、時間的な序列も心の動きに応じた順序にならなくてはならないであろう。即ち、対象の置かれている圏内に主体も手段も投入されていなくてはならない。

また一方において、記憶というものについて考察してみると、過去の記憶や印象は反復されるばかりでなく、秩序づけられ、位置づけられ、そして心理的経験としての時間の流れの中での異った時点に関係づけられている。このような位置づけは、個々の事件を全て包含する系統的序列として時間を考えない限り不可能である。時間を意識するということは、このような系統的序列の概念を必然的に含んでいる。

時間と空間とはあらゆる現実が関係している枠である。いかなる現実の事物も、時間と空間の条件のもとでこれを考察する以外には方法がない。有機的な生命とはそもそも時間の中で進展する限りにおいてのみ存在しうるのである。それは「物」ではなくて、過程なのである。

そうしてみると、われわれの意識における時間の問題は実は序列の問題、即ち前後関係という配列の問題に他ならないことが判ってくる。われわれが思い出す場所、それはわれわれの人生の過去の或る時点を意味し、その時点を離れては何の意味も持たないのである。従って逆に配列の問題は時間の問題を造り出すことになる。即ち意識の変化が多ければ、それだけ時間は意識の中で永くなる。換言すれば、時間は造られるのだ。

現実の存在・世界をどのようにして、同時的なものとして描写表現するかという問題と、逆に意識される時間、即ち系列的配列としての意識をどのようにして同時的現象としての現実の中に位置づけるかという問題、これが「ユリシーズ」の方法の本質であり、„Schlafwandler“において Broch が意図した問題であったと云うことができる。そしてこれが現代の作家が直面している共通の問題であり、最大の問題のひとつであることは疑うべくもない。

×                      ×                      ×

### ベルリンの救世軍少女の話 (13)

この時代、この崩壊しつつある人生は今もなお現実性をもっているだろうか。私の無関心は日に日に増大している。というのも、恐らく私よりも鞏固であろう現実に摺り潰されているからではなく、到るところで非現実に突きあたっているからなのだ。ただ積極的な行為の中のみ自分の人生の意義と本質的な特性とは求めうるのだということを、私は徹底的に意識しているのだが、しかしこの時代には唯一真実な積極性、哲学するという瞑想的な積極的態度をとる余裕はないのだという予感がするのだ。私は哲学するという試みをしている。——だがどこに認識の感蔽が残っているだろうか。それは疾うに死滅してしまっていないか。哲学はその対象の崩壊に直面して、単なる言葉へと自ら崩壊してしまっていないか。この存在をもたぬ世界、安らぎをもたぬ世界、己れの均衡を僅かに、増大する速度の中のみ辛うじて見出し、保ちえているこの世界、この狂暴性は人間の見せかけの積極性となって、人間を無の中へと投げ込んでしまう。ああ、最早や哲学することのできぬ時代の断念ほど底深いものがあるだろうか。哲学するという行為すら、一つの美的遊戯、最早や存在しない遊戯となってしまった。哲学は悪の徒勞になってしまった。一日の夕べを退屈して過ごす市民の仕事となったのだ。われわれには数学以外には何ひとつ残されていない。最早や法則以外には何ひとつ残っていないのだ。

私を支配し、このユダヤ人達の住居に縛りつけている状況は、最早や断念と呼べるべきものではなくて、むしろ、一切を包み込む異質性に満足することを知った一つの知慧であるかのような気がする。というのが、ヌヘムとマリーさえ私には異質だからだ。私の最後の希望、つまり彼等が私

の被造物であって欲しいという希望、私が彼等の運命を決定すべく手中にしているのではあるまいか、という満さるべくもない甘美な希望、それは彼等に向けられたものであった。ヌヘムとマリー。彼等は私の被造物ではないし、また過去においても決してそうではなかった。世界を形づくることができる、という虚偽の希望！

世界は自己の存在を所有しているだろうか。否。ヌヘムとマリーは自己の存在を所有しているだろうか。絶対にそんなことはない。なぜなら、如何なる存在者も自己の生活を生きてはいないからだ。しかし、命運を決定する検問所は私の力と思考の領域のずっと外側にある。私自身はただ自分自身の法測に則り、私自身の予め定められた仕事をなすうらだけで、それを越えることはできない。ヌヘムとマリーという被造物に対する私の愛情がたとえ消えなくても、私が彼等の魂と命運のための戦いを止めなくても、彼等を左右する検問所はやはり私にとっては、相変わらず手の届かない所であって、私の眼には隠されたままなのだ。時々玄関で私が出てはいるが、しかし私にとっては永久に閉ざされた部屋の中でだけ自分本来の姿を取り、自分の代表者であるリトヴァクを通じてのみ私との付き合いを保っている、あの白髪の老人のように。それらの検問所はちょうど、僧院の談話室に写真が掛っている白髪のポート将軍のように、私には隠されたままなのだ。そしてもし私の考えが正しければ、それは全然戦いなどというものではない。ある老人に対する戦いでもなければ、救世軍の将軍に対する戦いでもない。むしろ私は、彼等の二人とも満足させようと努めているくらいなのだ。そして、ヌヘムとマリーをわがものにしようとする私の努力も彼等のためなのだ。いやそれどころか、私はときどきあの老人達の愛を自分の行為でかち取って、彼等が私を祝福してくれ、私が淋しく死んでしまったりしないようにすることが絶対に重要だと思ふことさえある。なぜなら、現実には法則を与えてきた人々のもとにあるのだから。

これは断念だろうか。それは一切の美的なものに対する嫌悪だろうか。かつてはどこに私は立っていたのか。私の人生は背後でたそがれにつつまれ、果して自分がこれまで生きてきたのか、それともそれは私に語られたものなのか、私には判らない。それほどそれは遙かな海の中に沈んでしまっている。幾つもの船が私を極東の岸辺、遙かな西の国の海辺へと運んだのだろうか。私はアメリカの農園の綿花つみ労働者だったのか。象の棲むインドの密林の白い狩人だったのか。一切が可能だ。ありそうにもないことは何ひとつないのだ。公園のなかの邸宅だったことだって、決してありえぬことではないだろう。高いもの、深いところ、一切が可能なのだ。なぜなら、それ自身のためにあるこのダイナミックな世界では、一見動き続け、一見静止し続けている明瞭なものも、何ひとつそのままの姿を保ちはしないのだ。私の自我は投げ出され、無の中へ投げ出され、憧れは満されることなく、約束の国は到ることなく、ますます大いなる、到り着くことのない明澄の国は眼に見ゆることなく、而して、われわれの求むる共同社会は力なき共同体ではあれ、悪意に満ちている。意味のない希望、往々にして根拠なき高慢——世界は異質な敵であることに変わりはない。いや、敵といってもまだ足りない。その表面を私は手でまさぐることはできるだろうが、その中には決して入り込むことのできない異質のものだ。それは絶えず増大していく異質性において異質であり、絶えず増大していく盲目性において盲いており、故郷の夜の記憶の中において消滅し崩壊していく。私はこれまで多くの道を歩いてきた。一切の他のものがどこまでも分岐しつつ注ぎ込んでいく、あるひとつの物を見つけるために。そして、神さえも私によって決められたのではなく祖先代々決められていたのだ。

私はヌヘムにこういった。「君達は疑い深い民族だね。悪意ある民族だよ。神さえも君達は、いつもいつも神自身の書物の中で監視しているのだからね。」

彼はこう答えた。「法の存在に変わりはありません。一切を法から読み取ってしまった時に、初めて神はあるのです。」

私はマリーにいった。「君等は勇敢だが、しかし思慮のない民族だよ。君等は、善良でさえあればい

い、音楽を弾いてさえいればいい、そうすることで神を惹きつけているのだと信じているんだ。」

彼女はこう答えていった。「神を喜ぶことが神なのですわ。神の恩寵は尽きることがありません。」

私は自分にこういい聞かせた。「お前は頓間だ。お前はプラトン主義者だ。お前は、世界を捉えて思うままに形造ることができる。自分自身を神のもとへと救うことができると思っている。お前はそのため血を流しているのに気がつかないのか。」

私は自分に答えていった。「そうだ、おれは血を流しているのだ。」

× × ×

### 価値の崩壊 (5) : 論理的附録

プロシア帝国クルム幼年学校においては、例えばローマ・カトリック神学校におけるのとは異った思考様式が支配していた、ということを確認しても、しかし「思考様式」というものの概念は、「直観」という言葉にその方法論上の十字架像を置く、あの哲学的歴史的な諸の方向の曖昧さを思い出させる。なぜなら、思考と論理のA・プリオリな一義性は様式上の曖昧さを許さないからである。だからして、そういう先験的一義性は精神の先験的自己把握以外にはいかなる他の直観も必要とはせず、他のすべては経験的な異常型の領域、哲学的研究にではなくて、心理学的、医学的研究に委ねられている病理学的異常型の領域にありとするのである。自我の絶対的論理に対する、そしてまた神の絶対的論理に対する、人間の脳の経験的且つ現世的思考の機能不全。

×

或いはこういう異論もあるであろう。即ち、絶対的形式的論理は事実存在することに変りないし、人間の脳にとって不変である一と。変るのはただ思考内容だけであり、世界の実体の洞察が変るだけだ。だからして、それはせいぜい認識理論の問題にすぎず、決して論理的問題ではない。論理はあくまで数学と同じように「様式のない」ものだ、と。

×

論理的なものの形式は内容と事実上にも関わりないであろうか。つまり、奇妙なことだが、どこかでそれ自身は内容ではないのか。恐らくそれが一番はっきりしているのは、一連のいわゆる形式的証明を追求する場であろう。なぜなら、これら一連の証明の各部分が公理であり、或いは例えば矛盾の定理がそうであるように、公理的な定理であって、従って乗り越えることのできぬ明証性の制約を形成している（しかし遂には、例えば除外された第3の定理の場合と同様、いつかやはり乗り越えられるのだが）、その明証性はただより内容的に把えられるけれども、もう形式的には証明されえないような、そういう陳述であるというばかりではなく、それを越えて、そもそもそのような類の論理的な鎖は設定されうるものではなからうし、メカニズム全体を諸原理を適用しながら維持していくような超論理的でしかも、一切の形式限界の前面移行にも拘わらず究極において形而上学的な、そしてまた内容的な諸原理がもし存在しなかったならば、結果と証明の論理的機構のすべては直ちに停止することになるであろう。形式的論理という建築物は内容的な基盤の上に立っているのだ。

×

直観主義的一心理主義的な観念論は「真理感情」というものを前提としているのであるが、すべての疑問の連鎖は、驚きの「それは何か」で始まり、常に繰り返される「なぜ」でうけつがれ、結局は先の「真理感情」の明証性に落ち着く。即ち、究極の公理的明証性に落ち着くのだ。つまり、「そうであった、別な風にはではない」という具合に。そこで、A・プリオリな、そして純形式的なロゴスの不可変性

に直面した場合に、その真理感情は余計な導入物だとしても、それは論理的なものにおける内容的な諸要素に直面した場合、新たなそしてより正当な名譽を手に入れることになる。なぜなら、問いと証明連鎖の末端における明証性の設定は形式的な不変性から解放されており、次には、それにも拘らず論理的証明過程自身とその形式に対して決定的な影響を及ぼすことになるからである。従って、そこから生じて来る問題は次のようになる。「どのようなやり方で、例え論理的公理的、或いは論理外的性質のものであるにせよ、形式的な不変性を維持する場合に思考様式の変性がはいつて来るように、内容が形式的論理性の中にはいり込みうるのか。」この問題は最早や心理学的問題とか経験的問題とかではなしに、方法論的、形而上学的問題なのだ。なぜなら、その背後には全くア・プリオリに、一切の倫理的なものの原問題が存するからである。即ち、如何にして神は誤ちを見逃し、如何にして神の世界で狂人が生きることがあるのか、という問題がそれである。

×

疑問の連鎖というものはそもそも閉じることがないのだと考えることもできよう。存在論的な疑問の連鎖がすべて、こういった特質をもっていることは明らかである。—— 根本概念から根本概念へ、元素から原子へ、原子から電子へ、電子からエネルギー質量へと、どこまでも移行していき、いつでもただ暫定的な支点に到達するに過ぎない物質の問題、それはこのような無限な疑問の連鎖の一例である。

×

如何なる個所で、かかる類の疑問の連鎖が破れるのかが、今日、真理感情と明証感情の問題であり、従って、現在効力のある公理主義の問題なのである。ターレスの論に據ればこの明証点が存在論的な疑問連鎖の代りに「水」という物体で置きかえられるとされるが、それ自体、ターレスにとっては公理主義体系が妥当であったろうが、その体系の内部では、物質の水一質量が「説明可能」であるかの如く見えたに過ぎないということを証拠だてている。この場合、疑問の連鎖を停止させているのは、内容的公理主義であり、非形式的、論理的公理主義であり、また一般に行われている天地創造論の公理主義なのだ。(以下略)

×

×

×

紙数の制約から勿論その全部を掲げることはできないが、特に重要な二つの構成要素「ベルリンの救世軍少女の物語」の第13章及び「価値の崩壊」の第5章の一部分を上に出して見た。